

[論文]

保育園内における人間関係と向社会的行動の関連

今井 由美

The Relation Between Human Relationships and Prosocial Behavior In Nursery School

Yumi Imai

キーワード：人間関係、向社会的行動、保育園、保育士、保育園児

Key Words : human relationships, prosocial behavior, nursery school,
nursery teacher, nursery school child

要約：本研究は、保育園児が1日の大半を過ごしている保育園という環境下に焦点を当て、保育士からみた園児の向社会的行動の表出、友人関係、担任との関係を把握し、保育園内における人間関係と向社会的行動の関連を検討した。その結果、保育士からみると、保育園内における向社会的行動の表出は女児に多く、また3歳児より4,5歳児に多くみられていることが明らかとなった。友人関係、担任との関係においても性差がみられ、保育士は、女児の方が人間関係を良好に築いていると認識していることが分かった。一方で、きょうだい差は確認されず、保育士からみると、きょうだいの有無は保育園内での園児の人間関係の構築や向社会的行動の表出には影響していないという結果となった。保育士からみた園児の向社会的行動の表出、友人関係、担任との関係の関連を分析したところ、いずれにおいても正の相関がみられ、保育士が認識している保育園内における良好な人間関係と、園児の向社会的行動の多さには関連があることが示された。

1. 問題と目的

近年、人間関係の希薄さが問題となり、幼いうちから人間関係を根底にしたさまざまな問題が生じているとされている。例えば、文部科学省(2018)による平成 29 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果では、全国の小中高校及び特別支援学校におけるいじめの認知(発生)件数は 414,378 件となり過去最多となった。さらに、小学校におけるいじめの認知(発生)件数が 317,121 件と最も多くなり、いじめの低年齢化が進んでいる。また、同調査における小学校での子どもの長期欠席の理由で最も多いのは、不登校であり 48.3%をも占めている。そして、この人数は 35,000 人を超え過去最多となった。こういった背景の 1 つには、人間関係の希薄さに加え、相手の気持ちを共有し、相手を思いやる向社会性(首藤、2006)の低さがあげられる。つまり、相手を思いやる向社会的行動の表出が低下していると考えられている。

向社会的行動は、Eisenberg・Mussen(1991)によれば、他人あるいは他の人々の集団を助けようとしたり、こうした人々のためになることをしようとしたりする自発的な行為と定義されている。向社会的行動における研究は、家族が社会化の中心的なエイジェントであるとされ、子どもの初めての社会である家庭環境が大きな基盤(島田、桂田、2015)であるという考えの下から、両親の養育性が向社会的な行動傾向の発達を育てるといった仮説をかなり支持している。そのため、親の養育態度、家族、夫婦間と子どもの向社会的行動の関連については、これまでたくさんの研究が行われてきた。例えば、島田・桂田(2015)は、母親自身の向社会的行動や養育態度がどのように幼稚園児の向社会的行動に影響しているのかを研究している。また、親や家族間として母親のみに焦点が当てられていることが多いことを踏まえ、首藤(2006)は母親のみならず父親や夫婦間にも焦点を当て、保育園及び幼稚園児の向社会的行動との関連を研究している。さらに森下(2005)も母親に加え、父親の養育態度と幼稚園児の向社会的行動との関連を研究している。

しかしながら、今日では女性の就業や社会進出における意識の向上などにより、その子ども達は、保育士らと保育園で過ごす時間が増えてきている。そこで、本研究では、子どもが 1 日の大半を過ごしている保育園という環境下に焦点を当てる。保育士からみた園児と友人との人間関係、園児と担任との人間関係を把握し、保育園内における人間関係と向社会的行動の関連について分析を行う。

さらに、少子化が進みきょうだいのいない子どもが増えているという昨今の社会状況にも注目したい。Eisenberg・Mussen(1991)は、子どもの向社会的行動の表出においてきょうだいの影響を述べる際、アメリカの子どもの 80%以上がきょうだいを一人あるいはそれ以上持っている、両親といる時間の二倍以上をきょうだいといっしょに過ごしているということを念頭に置いている。しかし、このことは今の日本の社会状況とは異なっている。そのため、本研究では、保育園内での人間関係の構築や向社会的行動の表出にきょうだい差が生

じているのかどうかも検討していく。

また、これまでの向社会的行動の研究の大半では一貫した性差は見出されていなく、性差がみられる場合には、女の子のほうがやや多いという結果(Eisenberg ら、1991)がある。しかしながら、この結果は、親の養育態度や家族や夫婦間と子どもの向社会的行動の関連から求められたものであり、本研究のように保育園内での保育士の認識から検討したものではない。そのため、保育士からみた園児の向社会的行動の表出における性差についても検討をする。

2. 方法

調査対象者及び手続き

埼玉県内にある協力が得られた 2 つの保育園の担任保育士に対し、クラスの園児人数分の質問紙を配布し回答を求めた。回答者は 3 歳児担任 2 名、4 歳児担任 2 名、5 歳児担任 2 名の合計 6 名であり、全て女性保育士であった。その際、調査内容が保育者及び子どもの不利益にはならないことを明示し、同意書への署名も合わせて求めた。2 園の合計で 3 歳児 28 名、4 歳児 31 名、5 歳児 31 名の合計 90 名が分析対象となった。統計ソフトは、SPSS Statistics Ver.26 を使用した。

調査時期

2019 年 5 月～7 月

調査内容

1) 保育士からみた園児の向社会的行動

保育士からみた園児の向社会的行動に関しての質問紙は、武田ら(2004)が作成した「思いやり行動尺度」、塚越・松永(2009)が作成した「向社会的場面」、村上ら(2016)が作成した「小中学生用対象別向社会的行動尺度」を参考に、実際の保育園での活動や様子、関係性を踏まえ調査項目を決定した(Table1)。

2) 保育士からみた園児の友人関係

保育士からみた園児の友人関係に関しての質問紙は、米澤(2008)が作成した「認知活動特性尺度」、「学習発達到達度尺度」を参考に、実際の保育園での活動や様子、関係性を踏まえ調査項目を決定した(Table2)。

3) 保育士からみた園児と担任との関係

保育士からみた園児と担任との関係に関しての質問紙は、米澤(2008)が作成した「学習発達到達度尺度」、小沢(2011)が作成した「気になる子へのかかわり尺度」を参考に、実際の保育園での活動や様子、関係性を踏まえ調査項目を決定した(Table3)。

以上の項目を使い質問紙を作成した。尺度を統制するために、全ての項目について 5 件法(5.とてもよくあてはまる、4.ややあてはまる、3.どちらともいえない、2.あまりあてはま

らない、1.全くあてはまらない)で担任保育士に回答を求めた。また、各園児の性別ときょうだいの有無についても回答を求めた。

Table1 保育士からみた園児の向社会的行動尺度の項目

番号	項目
1	この園児は、泣いている子がいればなぐさめることができる
2	この園児は、わからなくて困っている子がいたら教えてあげられる
3	この園児は、仲間に入れない子がいたら誘うことができる
4	この園児は、物をなくして困っている子がいたら一緒に探すことができる
5	この園児は、友だちのために先生に援助を求めることができる
6	この園児は、具合が悪い、ケガをしたお友達を心配したり気遣ったりすることができる
7	この園児は、友だちが頑張っているときに応援できる
8	この園児は、友だちをほめることができる

Table2 保育士からみた園児の友人関係尺度の項目

番号	項目
1	この園児は、友だちと遊ぶことが好きである
2	この園児は、友だちの話を聞くことができる
3	この園児は、友だちと仲良く遊ぶことができる
4	この園児は、友だちとよく笑っている
5	この園児は、友だちと一緒にいることが多い
6	この園児は、友だちとケンカをしてもまた仲良くできる

Table3 保育士からみた園児と担任との関係尺度の項目

番号	項目
1	この園児に、うまく対応できないことがある
2	この園児の気持ちが分からないときがある
3	この園児の特徴がつかめない
4	この園児は、担任の話を聞くことができる
5	この園児とはよく話をする
6	この園児は、担任を避ける
7	この園児は、困った存在である
8	この園児は、担任とよく遊びたがる
9	この園児は、担任のそばによく寄ってくる
10	この園児は、扱いにくいと感じる

3. 結果

1) 保育士からみた園児の向社会的行動

保育士からみた園児の向社会的行動尺度に相当する項目の平均値を算出し、向社会的行動得点($M=3.18, SD=0.96$)とした。また、尺度の信頼性をクロンバックの α 係数によって求めた。その結果、 $\alpha=.93$ であり十分な値が得られた。

続いて、性別、年齢、きょうだいの有無による差があるかどうかを検討するために 2(性別) \times 3(年齢) \times 2(きょうだいの有無)の三要因分散分析を行った(Table4)。

その結果、性別、年齢の主効果が有意であった($F(1,78)=7.04, p<.05$ 、 $F(2,78)=15.25, p<.01$)。交互作用は、いずれにおいてもみられなかった。女兒が男児より有意に高いことが確認された。年齢間においては Tukey の HSD 法(5%水準)による多重比較を行ったところ、3歳児と4歳児間、3歳児と5歳児間で有意な差が認められた。それぞれの平均値やSDをTable5に示す。

Table4 向社会的行動得点と性別、年齢、きょうだいの有無の分散分析結果

	F値	多重比較
性別	7.04**	
年齢	15.25*	3歳児<4歳児、3歳児<5歳児
きょうだいの有無	0.01	
性別*年齢	1.3	
性別*きょうだいの有無	0.06	
年齢*きょうだいの有無	0.72	
性別*年齢*きょうだいの有無	0.94	

** $p<.01$ * $p<.05$

Table5 向社会的行動得点と性別、年齢、きょうだいの有無の平均値及びSD

性別 年齢 きょうだい	女兒						男児					
	3歳児		4歳児		5歳児		3歳児		4歳児		5歳児	
	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無
M	2.98	2.75	3.44	3.2	3.91	4.5	2.06	2.17	3.39	3.06	3.46	3.5
SD	0.73	1.35	1.04	1	0.63	0.53	0.7	0.73	0.97	0.38	0.6	0.31
N	8	4	12	5	10	2	10	6	10	4	15	4

2) 保育士からみた園児の友人関係

保育士からみた園児の友人関係尺度に相当する項目の平均値を算出し、友人関係得点($M=3.78, SD=0.83$)とした。また、尺度の信頼性をクロンバックの α 係数によって求めた。その結果、 $\alpha=.91$ であり十分な値が得られた。

続いて、性別、年齢、きょうだいの有無による差があるかどうかを検討するために 2(性別) \times 3(年齢) \times 2(きょうだいの有無)の三要因分散分析を行った(Table6)。その結果、性別、年齢の主効果が有意であった($F(1,78)=4.81, p<.05$ 、 $F(2,78)=3.45, p<.05$)。交互作用は、いずれにおいてもみられなかった。女児が男児より有意に高いことが確認された。年齢間においては Tukey の HSD 法(5%水準)による多重比較を行ったところ、3 歳児と 5 歳児間で有意な差が認められた。それぞれの平均値や SD を Table7 に示す。

Table6 友人関係得点と性別、年齢、きょうだいの有無の分散分析結果

	F値	多重比較
性別	4.81*	
年齢	3.45*	3歳児<5歳児
きょうだいの有無	0.13	
性別*年齢	1.65	
性別*きょうだいの有無	0.03	
年齢*きょうだいの有無	0.01	
性別*年齢*きょうだいの有無	1.35	

* $p<.05$

Table7 友人関係得点と性別、年齢、きょうだいの有無の平均値及び SD

性別 年齢 きょうだい	女児						男児					
	3歳児		4歳児		5歳児		3歳児		4歳児		5歳児	
	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無
M	3.77	3.46	3.82	4.07	4.37	4.75	3.08	3.58	3.97	3.79	3.72	3.5
SD	0.68	0.85	0.78	1.04	0.53	0.12	0.9	0.64	0.88	1.16	0.84	0.38
N	8	4	12	5	10	2	10	6	10	4	15	4

3) 保育士からみた園児と担任との関係

保育士からみた園児と担任との関係尺度に相当する項目の平均値を算出し、担任関係得点($M=3.73, SD=0.62$)とした。また、尺度の信頼性をクロンバックの α 係数によって求めた。その結果、 $\alpha=.80$ であり十分な値が得られた。

続いて、性別、年齢、きょうだいの有無による差があるかどうかを検討するために 2(性別) \times 3(年齢) \times 2(きょうだいの有無)の三要因分散分析を行った(Table8)。その結果、性別の主効果が有意であった($F(1,78)=11.84, p<.01$)。交互作用は、いずれにおいてもみられなかった。女児が男児より有意に高いことが確認された。それぞれの平均値や SD を Table9 に示す。

Table8 担任関係得点と性別、年齢、きょうだいの有無の分散分析結果

	<i>F</i> 値
性別	11.84**
年齢	1.25
きょうだいの有無	0.5
性別*年齢	2.54
性別*きょうだいの有無	1.21
年齢*きょうだいの有無	0.88
性別*年齢*きょうだいの有無	0.35

** $p < .01$

Table9 担任関係得点と性別、年齢、きょうだいの有無の平均値及び SD

性別 年齢 きょうだい	女児						男児					
	3歳児		4歳児		5歳児		3歳児		4歳児		5歳児	
	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無
<i>M</i>	4.14	4.2	3.79	3.46	4.01	4.45	3.58	3.42	3.77	3.78	3.56	3.33
<i>SD</i>	0.58	0.36	0.45	0.67	0.56	0.49	0.72	0.9	0.51	0.22	0.66	0.3
<i>N</i>	8	4	12	5	10	2	10	6	10	4	15	4

4) 尺度間の関連

保育士からみた園児の向社会的行動尺度、友人関係尺度、担任関係尺度の相関を Table10 に示す。3 つの尺度は互いに有意な正の相関($p < .01$)を示した。

Table10 保育士からみた園児の 3 尺度間相関

	向社会的行動	友人関係	担任関係
向社会的行動	—	.54**	.36**
友人関係		—	.37**
担任関係			—

** $p < .01$

4. 考察

1) 保育士からみた園児の向社会的行動に関して

保育園内における園児の向社会的行動の表出は、保育士からみると高かった。性差、年齢差、きょうだいの有無による検討では、いずれにおいても交互作用は確認されず、性別、年齢の主効果が確認された。つまり、保育園内における園児の向社会的行動は女兒に多いと、保育士は認識している。また、保育士からみた向社会的行動の表出は 3 歳児では少ないが、4, 5 歳児で多くなることも確認された。さらに、保育士が認識している園児の向社会的行動の表出は、きょうだいの有無には影響されていないことも示された。

2) 保育士からみた園児の友人関係に関して

保育園内における園児の友人関係は、保育士からみると良好であった。性差、年齢差、きょうだいの有無による検討では、いずれにおいても交互作用は確認されず、性差、年齢差での主効果が確認された。つまり、女兒の方が友人との関係をうまく築いていると、保育士は認識している。また、保育士からみると、友人との人間関係がより良好に築けているのが 5 歳児であると確認された。さらに、保育士が認識している園児の友人関係の構築は、きょうだいの有無には影響されていないことも示された。

3) 保育士からみた園児と担任との関係に関して

園児と担任との関係は、保育士からみると概ね良好であるが、一方で、関係を築くことに困難を感じる場合もあるということが分かった。性差、年齢差、きょうだいの有無による検

討では、いずれにおいても交互作用は確認されず、性別の主効果が確認された。つまり、女兒の方が担任との関係をうまく築いていると、保育士は認識している。また、保育士が認識している園児と担任との関係の構築は、年齢差にもきょうだいの有無にも影響されていないことも示された。

4) 尺度間の関連について

保育士からみた園児の向社会的行動の表出、友人関係、担任との関係の関連性が相関分析によって確認された。いずれの関係においても正の相関が確認され、保育士からみて友人関係が良好に築けている園児と、向社会的行動の表出の多さには関連があることが示された。さらに、保育士からみて担任との関係が良好に築けている園児と、向社会的行動の表出の多さにも関連があることが示された。これらのことから、保育園内での人間関係の構築が、園児の向社会的行動の表出に影響していると考えられる。しかしながら、保育士が、園児と関係が良好であると感じている場合には、その園児の向社会的行動や友人関係への評価が自然と高くなってしまふことが予測される。その結果、保育士からみて担任との関係が良好に築けている園児に、向社会的行動の多さ及び良好な友人関係が反映された可能性も推測される。

5) まとめ

本研究の目的は、保育園児が 1 日の大半を過ごしている保育園という環境下に焦点を当て、保育士が認識している保育園内における園児の人間関係を把握し、その人間関係と向社会的行動との関連を検討することであった。

その結果、女兒の方が向社会的行動を多くとり、女兒の方が保育園内において良好な人間関係を築いていると、保育士は認識していることが分かった。また、保育士が、保育園内における園児の人間関係の構築や向社会的行動の表出を認識する際には、きょうだいの有無による影響がないことも分かった。しかしながら、きょうだい差による影響は、きょうだいの有無だけでなく、今後、その構成や性別などの要因も考慮しながら、詳細に検討していく必要があるであろう。

さらに、保育士からみて、保育園内において友人関係や担任との関係を良好に築いている園児と、向社会的行動の表出の多さには関連があることが示された。園児の向社会的行動の表出は、家庭や親や家族による影響が大きいとされているが、保育園内における人間関係も影響していると考えられる。今後は、保育園内における人間関係と向社会的行動の表出の因果関係を明らかにしていくために、数量的な観点からだけでなく、質的な面からの分析も必要であろう。

参考・引用文献

- 赤田太郎 (2010) 保育士ストレス評定尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究 81(2)、158-166
- Eisenberg,N.&Mussen,P. (1989) The roots of prosocial behavior in children. Cambridge University Press. (菊池章夫・二宮克美 共訳 (1991) 思いやりの発達心理 金子書房)
- 伊藤順子・丸山(山本)愛子・山崎晃 (1999) 幼児の自己制御認知タイプと向社会的行動との関連 教育心理学研究 47、160-169
- 文部科学省 (2018) 平成 29 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/10/1410392.htm (2019 年 9 月 27 日確認)
- 森下正康 (2006) 幼児期の親子関係と向社会的行動・攻撃行動のモデリング(2)―父母の態度パターンによる分析― 和歌山大学教育学部 教育科学 56、33-41
- 村上達也・西村多久磨・櫻井茂男 (2016) 家族、友だち、見知らぬ人に対する向社会的行動―対象別向社会的行動尺度の作成― 教育心理学研究 64、156-169
- 小沢日美子 (2011) 「気になる子」との‘かかわり’についての尺度構成に関する試み―保育者志望学生を対象にして― 千葉敬愛短期大学紀要 33、1-10
- 島田知華・桂田恵美子 (2015) 幼児の向社会的行動―母親自身の向社会的行動や養育態度との関連― 関西学院大学心理科学研究 41、45-49
- 首藤敏元 (1997) 乳幼児の思いやり行動と家族の共感関係の検討 平成 8 年度厚生省心身障害研究 効果的な親子のメンタルケアに関する研究 255-261
- 首藤敏元 (2006) 幼児の向社会性と親の共感経験との関連 埼玉大学紀要 教育学部(教育科学) 55(2)、121-131
- 武田京子・菅原正和・吉田澄江・笹原裕子・加藤和子 (2004) 幼児の思いやり行動と攻撃行動―IWM (Internal Working Model) との関係 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 3、47-54
- 塚越由佳・松永あけみ (2009) 大人の「言葉かけ」が幼児の向社会的行動に及ぼす影響(その 1)―親の「言葉かけ」と子どもの向社会的行動との関連― 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編 58、135-142
- 塚越由佳・松永あけみ (2010) 大人の「言葉かけ」が幼児の向社会的行動に及ぼす影響(その 2)―親の「言葉かけ」と子どもの向社会的行動との関連― 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編 59、195-204
- 米澤好史 (2008) 幼児の認知活動特性・学習発達到達度・人間関係特性尺度と教師、親の教育方針態度尺度・子育てこども観・指導方針尺度の作成 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要 18、69-78